

## (1) 構成員の活動について

## ① 支援が必要な人に対する支援の考え方

A 出会った人について、その人に何が必要か、誰が必要かを考える。

B 「物理的なものがない状態」と、「一緒に喜んでくれる人がいない等の状態」の2軸に対する支援が必要。

C 親には子どもの本当の気持ちが届きにくい

→ 何かやりたいけれどわからないという若者の話、見えにくい悩み、心の葛藤を聞く場所が必要。

D 若者に対し、いろいろな世代と交流して、いろいろなコミュニティを持っている人と話し、多様な価値観に触れて、社会とのつながりを感じてほしい。

E 「自分らしく生きる」ことを大事に考える。

F 自分とは異なるいろいろな人と出会ってタッグを組めるくらい仲良くしようとするのが大事。

## ② 地域福祉活動を行うにあたっての考え方

A 課題を発掘し、提案作成・実施・検証までを1セットとしている。

B 地域の課題解決のほかに、人の成長の機会の提供を目的としている。

C 地域生活の継続のためには人材育成が必要と考える。

D 地域のリーダー育成が必要と考える。

E 地域の受け手に対して立上げ支援、伴走支援を行う。

F 本来業務の前段として、地域の高齢者と健康なうちから関わることをしている。

G 買物は地域で暮らし続ける上での第一要件だと考えている。

H 「高齢化率が高い地域」は、「住民が長く健康で住み続けている地域」と捉えている。

I 人がつながる居場所を大事にすることを考えている。

J 就職や仕事を絡めない、テーマのないコミュニティの形成(第3の居場所)

K 社会も周囲もみんなが幸福な生き方ができないかを考えている。

L いろいろな人たちと支え合ってごちゃごちゃしている中から平和を見つける。

M 家族の力を地域のボランティアで全て補うことは考えていないが、最初の気付き等は地域のボランティアの活動が大事と考えている。

## ③ 工夫している点

- A 新たな地域活動の実施にあたっては既存のサービス関係者と調整を行っている。
- B 関係団体と常日頃から懇親を深めている。
- C 事業を一つ持ち込み、事業をハブとして付け加えていく。
  - 新しいことを何か起こさないと、「新たにつながりをつくる」「つながりを変える」のは難しい。
  - 新しいことには抵抗がある。
  - 既存の事業に新しい要素(課題解決につながるイメージを持ったもの)を少し加える。
  - ないものねだりをせずに、あるもの(既存の事業)の組み合わせを変えたり見方を変えたりする。

## ④ 活動の効果

- A 支援が必要な立場の人たちが地域活動を行って感謝され、活動のモチベーションが上がっている。
- B 「既存の地域団体だけのまち」から、「関係者・関係団体を含めたまち」に変わってきた。

## (2) 構成員が活動上で感じる地域生活課題

### A 単身高齢者の増加の加速化

- 家族がいても、遠隔地に在住していたり、支援を受けられなかったりするケースの増加
- 家族の縁が切れた人に対し、最低限の保証だけではなく、より豊かな生活を送るための仕組みの必要性
- 孤独死の増加(地域の支援者が終末に立ち会うケースもあり)
- 家じまいや入院時の補償の手続き

### B 地域のつながりの希薄化

- 地域の支援者世代が徐々に亡くなってきているが、次世代は横のつながりが希薄。

### C 何か困っているときに行ける場所の必要性

- 居場所の数が多いほど「頑張れる」意識が高くなる。
- 義務教育が終わった後でも安心して誰かに相談できる場所の必要性
- 若者が地域と関われる場所づくりは大人がすべきではないか。

### D 障害のある人が活躍する社会の必要性

- 多様性の理解が進む。 → 多様な人がさらに積極的に社会参加(好循環＝スパイラルアップ)
- 「担い手不足」への人材活用になる。
- (実現できないと)障害のない人が多様な人と出会う機会が奪われる。
- 参加したいけど皆と同じことをしたいわけではない(「ごちゃませ」ではなく「ごちゃごちゃ」)

## (3) 構成員が感じる地域福祉活動上の課題

- A 現在は行政としか連携していないが、今後は他の団体との連携が必要。
- B 社会福祉法人として公益事業を実施する責務があると考えている。
- C 若者が安心できる場合は、若者だけでも大人だけでもできることではない。  
→「自分がここで役に立つ」「誰かと一緒にいる心地よさ」→「この場所に留まろう」
- D 「誰一人取り残さない」は実現可能か。  
→ 権利と権利はぶつかり合う。  
→ 折り合いを付ける。対話を重ねてどうすればよいかを一緒に考える。
- E 「相談したくない」という人に対して  
→ 相談対応など「企画物サロン」ではなく、「何でもないサロン」の必要性
- F 地域の一部は盛り上がっても地域全体の同意が得られないことがある。  
→ 一定の力の人たちが障害になったりする。  
→ 新しいものに対する抵抗感 → 世代間で価値観が変わっていることを考える。
- G 「自分がしなければ」という負担感
- H 実施しても、誰も見ていない、誰も褒めていない。
- I 地域の状況・歴史・特徴を聞き、特色を活かしたプログラムを事業としてどう運営していくか。
- J 「全く不安がなくやる」ことはない。  
→ 「期待」が「不安」を少し上回るイメージを持つ。楽しく、面白くやる。乗せ上手になる。

# 今後の懇話会の予定

活動上の課題

## 第1回

地域福祉に関する市民意識調査結果など現時点の地域福祉の状況説明、**構成員から各々の活動上の課題提示**

## 第2回

**地域コミュニティビジョン検討会議**での検討状況を踏まえた意見交換及び**重層的支援体制整備**に係る意見聴取

## 第3回（令和8年5月頃）

策定された**地域コミュニティビジョン**を踏まえた地域福祉のあるべき姿についての意見交換及び**計画期間終了に伴う総括評価を踏まえた地域福祉に関する課題**について意見聴取

## 第4回（令和8年8月頃）

地域福祉のあるべき姿を実現するために必要な、**地域への支援の方向性**について意見聴取

## 第5回（令和8年10月頃）

市の支援の方向性に基づく**具体的な支援策**について意見聴取

## 第6回（令和8年12月頃）

次期地域福祉計画の**素案**について意見聴取

## 第7回（令和9年2月頃）

パブリックコメントを反映した**最終案**についての意見聴取